



Title	外国人多住地域の教育と国際交流活動：第2部 ブラジル人学校における教育と父母の意識：第5章 誰のためのブラジル人学校選択か：子どもに託された親の夢
Author(s)	小野寺, 理佳
Citation	『調査と社会理論』・研究報告書, 19, 69-81
Issue Date	2002-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/22643
Type	departmental bulletin paper
File Information	19_P69-81.pdf



第2部 ブラジル人学校における教育と父母の意識

第5章 誰のためのブラジル人学校選択か：子どもに託された親の夢

第1節 ブラジル人学校の開設

1999年より太田・大泉地区ではブラジル人学校が相次いで開校されている。この背景としてふたつの側面を指摘することができる。ひとつは、ブラジル帰国後に子どもがブラジルの学校教育にスムーズに入っていけるように準備させたいという日系ブラジル人の親の要望が増えてきたことである。これは学校設立の積極的な理由といえる。もうひとつは、日本の学校が日系ブラジル人児童・生徒を受けとめきれないという教育現場の問題である。これまで太田・大泉地区の公立学校はポルトガル語のできる日本語指導助手を配置する等の対応をしてきたが、それは日本語で日本の教育課程を修めることを目的としたものであるため、ポルトガル語忘失や日本語環境への不適応という問題が生じている。職場や日常生活においても日本人と日系ブラジル人のセグリゲート化が進展しているという社会状況を受けて、日本側の学校関係者のなかでは別学を求める機運が強まりつつあるといわれる。この場合、ブラジル人学校には、日本の学校の手余りに外国人児童・生徒の受け皿という現状打開策としての性格が付与される。

以下においては、2001年9月、太田・大泉地区のブラジル人学校3校に通学する児童・生徒およびその親を対象として実施した調査（表1-1）の結果をもとに、日系ブラジル人親子にとってブラジル人学校がどのような意味をもつのかを考える（3校の概要については第2部末尾の付記を参照）。その際、彼らの滞日長期化を「地域社会への絶えざる定住化」として捉えることとする。定住化が進行するなかで、ブラジル人学校に対して日系ブラジル人の親子はそれぞれ何を期待し、どのように取り組んでいるのか。また、彼らにとって何が問題になっているのだろうか。現実にはブラジル人学校の開設によって大人の世界のみならず子どもの世界のセグリゲート化が促進されつつあるといわれる。既に明らかにされたように、教育戦略として子どもを日本の学校に通わせる日系ブラジル人の親がいる一方で、果たして、ブラジル人学校を選択は日系ブラジル人の子どもに幸福な将来を約束するものといえるのだろうか¹⁾。

表1-1 調査概要

調査題目	ブラジル人児童の意識調査（児童・生徒用）ブラジル人の保護者への調査（両親用）
調査期間	2001年9月
調査対象	群馬県太田市及び大泉町のブラジル人学校；A、B、Cの3校に在籍する日系ブラジル人児童・生徒とその両親。児童・生徒用調査票は小2以上の年令の子どもに配布し、両親用調査票は全学年の両親に配布したため、児童・生徒配布数より両親配布数の方が多い。 配布数は、児童・生徒274人、両親470人である。内訳は、A校：児童・生徒40、両親60、B校：児童・生徒140、両親200、C校：児童・生徒94、両親210。
調査方法	質問紙配布→留め置き法、一部聞き取り
有効回収率	児童・生徒64.2%（176人）、両親56.6%（266人）
男女比率	児童・生徒票における男女比率（無回答3人）は、男子91人（51.7%）：女子82人（46.6%）、両親票における児童・生徒の男女比率（無回答1人）は、男子129人（48.5%）：女子136人（51.1%）。

第2節 ブラジル人学校選択の経緯

現在ブラジル人学校に在籍する児童・生徒のうち、来日後最初からブラジル人学校に通っているのは5割強であり、日本の学校からの転入学がおおよそ4割である。日本の学校からブラジル人学校に移るまで一時的に学校に通っていない期間があったケースおよび無回答が残り1割を占める（表1-2）。つまり、約9割の児童・生徒は不登校・不就学の経験はもたず、これまで日本の学校かブラジル人学校のいずれかには通っていたということになる。不就学・不登校・不適応児童・生徒の増加が深刻化するなか、彼らは、親など周囲の環境や経済状態等の点において恵まれた立場にある子どもといえるだろう。では、彼らはどのような理由・事情で、最初から、あるいは途中でブラジル人学校を選択したのだろうか²⁾。

はじめに、誰の意志でブラジル人学校を選択したのかを確認する。親の8割が、ブラジル人学校選択は「親の意志」であると回答している。それは、即ち、ブラジル人学校への転入学の多くは子どもの側から言い出されたものではないと親自身が認識しているということである。しかし、子どもに問うと、

表1-2 ブラジル人学校歴

(単位：人、%)

	来日後ずっとブラジル人学校	日本の学校から転校	日本の学校退学後暫く学校行かず	N.A	計
実数 (構成比)	145 (54.7)	102 (38.5)	2 (0.8)	16 (6.0)	265 (100.0)

表1-3 親がブラジル人学校を選択した理由 (単位：人、%)

	実数 (構成比)
学習レベルが子どもに合っている	23(8.7)
ポルトガル語の勉強ができる	42(15.8)
ポルトガル語で勉強できる	52(19.6)
ブラジルで進学するために役立つ	212(80.0)
ブラジルで就職するために役立つ	25(9.4)
ブラジル人学校に子どもの友人がいる	18(6.8)
子どもにブラジル人の友人を与えたい	13(4.9)
その他	28(10.6)
N.A	7(2.6)
データ数	265(100.0)
M.T計	420(158.5)

表1-4 親が子どもに望む学歴と子どもが望む学歴

(単位：人、%)

	小学	中学	高校	専門	短大	大学	大院	ソ/他	N.A.	データ数	M.T計
父親が子どもに望む学歴	1 0.4	3 1.2	4 1.5	6 2.3	7 2.7	127 48.8	88 33.8	7 2.7	27 10.4	260 100.0	270 103.8
母親が子どもに望む学歴	1 0.4	2 0.8	3 1.1	6 2.3	7 2.7	127 48.3	99 37.6	7 2.7	22 8.4	263 100.0	274 104.2
子どもが望む学歴	2 1.1	8 4.5	8 4.5	1 0.6	11 6.3	69 39.2	56 31.8	7 4.0	16 9.1	176 100.0	178 101.1

日本の学校を辞めた理由、ブラジル人学校に入学した理由ともに「親が決めたから」との回答は4割前後にとどまっており、親子の認識にはかなりの開きがある。これが意味するものは何か。おそらくは、学校選びにおいては親の意志が決定的だったといえるにせよ、子どもが自分なりにその選択を納得して受け入れるプロセスもあったということだろう。

それでは、親は具体的にどのような意図でブラジル人学校を選択するに至ったのだろうか。そして、その決定を子どもはどのように受けとめているのであろうか。

親がブラジル人学校を選択した主な理由上位3つは以下の通りである(表1-3)。1番目は、ブラジルで進学するのに役立つこと、2番目はポルトガル語で勉強できること、3番目はポルトガル語の勉強ができることである。なかでも、ブラジル進学におけるメリットをあげる親が圧倒的に多く、2位以下の4倍を超える。このうち日本の学校に通わせた経験をもつ親に日本の学校を辞めた理由をあらためて問うところ(複数回答)、「日本の学校ではポルトガル語が勉強できない」「子どもが日本の学校でいじめにあった」「日本語の力が日本の学校に行くのに不足していた」といった理由に回答が集まった。

これらの結果を一覧すると、専ら言語に関わる問題が親を悩ませてきたことがわかる。いじめも言葉のやり取りがスムーズに行えないことに多くを発していると理解するならば、言語の問題に含めることができよう(「日本語ができるようになってからはイヤなことはなかった。楽しかった。」(8年女子)「他の教室の男たちが俺をいじめてイヤだった。「日本語が話せないくせに。」「バカ。」(と言われた)。(4年男子))。しかし、親が特にそこで重視しているのは、生活言語としての言語能力のレベルアップの問題ではなく、まさに学習言語としての言語習得の可否である。それはなぜか。その一番の理由は、いうまでもなく、日系ブラジル人の親が子どもに十分な教育を与えたいと望んでいるからである。8割以上の親は子どもに大学以上の高学歴を獲得させたいと願っている(表1-4)。とりわけ高

収入が保証されるような実学系に進学させ、高度の資格や技術を獲得させたいとの思いが強い。実際、子どもに就かせたい職業を具体的に訊ねると、医師、歯科医師、弁護士、技術者などの高度専門職に集中する。その背景には、外国でブルーカラーとして低賃金で働く親自身の苦悩がある。親自身の最終学歴をみると、中卒と高卒が大部分を占め、大学卒以上は2割にも満たない。社会で成功するための条件として彼らは「個人の努力」「学歴」を特に重視しており、それゆえに、子どもには勉学に励み高学歴を獲得して高収入を確保し安楽な人生をおくらせたいとの親心が強まるのである。従って、親が最も警戒しているのは、日本語、ポルトガル語いずれにしても、子どもの言語能力が中途半端なレベルにとどまり、学習言語としての力が身に付かないことであろうと思われる。しかし、現実問題として、日本語を使用して入学試験をクリアしていくことの困難が予想されること、いずれブラジルに帰国したいとの希望をもっていることから、結果的に、ブラジルの大学進学に目標を定めるに至ったと推測できる。そして、そのために、本国の教育基準に則ってポルトガル語授業がなされるブラジル人学校を選ぶことにしたと考えられる。日系ブラジル人の親は、親自身の日本語能力が不十分であるために日本の学校に対しては積極的な対応ができずにいたが、ポルトガル語が通用する学校であれば、子どもの家庭学習をみてやることも、勉強の出来を把握し学校との連携を充分にとって問題解決をはかることもできるとの期待もあろう。

一方、子どもの側は親主導のブラジル人学校選択をどのように受け止めているのだろうか。日本の学校に通った経験をもつ子どもに日本の学校への印象を訊ねたところ（複数回答）、日本の学校に通っていて良かったこととしては「日本人の友達ができた」（68.7%）「日本語を学習した」（68.7%）「先生がよかった」（44.8%）「日本人にポルトガル語を教えた」（41.8%）「日本の給食」（40.3%）「クラスが楽しかった」（38.8%）「授業が楽しかった」（35.8%）「日本人にブラジル文化を教えた」（32.8%）と多くの項目が数多く選択された。他方、嫌だったこととしては「日本語がわからなかった」（47.8%）ことが特に多くあげられたが、それ以外には30%をこえるものはなく、なおかつ全体の回答数は少ないという結果となった。

このことから、日系ブラジル人の子どもは自らの日本語能力不足には自覚的であり、それが諸々の摩擦や不都合を招いていることを、残念に、あるいは、不満に思いつつも、日本の学校での生活そのものについてはそれほど悪い印象をもっていたわけではないと思われる。しかし、日本の学校を辞めた理由として「ポルトガル語が勉強できない」「いじめられた」「勉強が難しい」ことがあげられていることから、子どもにとっても言語にまつわる問題の解決が求められていたことは明らかである。ポルトガル語が磨かれず、日本語も十分に使いこなすことができない学校生活、つまり教育を受けるべき環境において学習言語が獲得されていない状況は子どもに大きなストレスをもたらしていただろう。日本の学校に通っていたときのことについては、「国語はつらい。」（7年男子）、「勉強わからない。」（6年男子）、「授業も日本語もわからなかった。」（6年男子）、「国語や社会の勉強がイヤだった。日本語がわからなかったの。」（8年女子）、「日本語で勉強難しい。先生が怒る。何故怒っているのかよくわからなかったからイヤだった。」（8年男子）といった言葉がきかれる。従って、ブラジル人学校選択理由として「ポルトガル語を勉強したい」「ポルトガル語で勉強した方がわかりやすい」「ブラジル人の友達を増やしたい」というポルトガル語環境への期待が数多く表明されていることは至極当たり前のことのように思われる（表1-5）。

しかし、注目すべきは「ブラジルでの進学」をメリットとしてあげる者が突出して多いことである。「高校か大学に行けば、いい仕事がもらえる。いい会社（に入れる）。学歴があれば、今は不景気だから、日本でもブラジルでも（うまくいく）。」（5年男子）という言葉が代表的なものである。子どもたちがまだ将来のことを具体的に考える年代に至っていないとするならば、これは子ども自身から生まれたアイデアというよりは、むしろ、親が子どもに言って聞かせた内容と考えられる。親に誘導される形でブラジル人学校進学を決意したことの証左といえるだろう。7割を超える子どもが大学・大学院以

表1-5 子どもがブラジル人学校を選択した理由（単位：人、％）

	実数（構成比）
親が決めたから	27(40.3)
学習レベルが自分に合っている	9(13.4)
ブラジルで進学するために役立つ	49(73.1)
ブラジルで就職するために役立つ	30(44.8)
ポルトガル語を勉強したい	28(41.8)
ポルトガル語で教えてくれる	22(32.8)
ブラジル人の友人を増やしたい	23(34.3)
友人がブラジル人学校にいる	8(11.9)
その他	5(7.5)
N.A	4(6.0)
データ数	67(100.0)
M.T計	205(306.0)

上の進学を希望し、医師、歯科医師、獣医師、弁護士、設計技師等の志望者が目立つのも、親の期待を反映したものと解釈できる。

以上、まとめると、親は子の将来を長期的に見据え、ブラジルの大学への進学を視野に入れて、よりよい教育環境を求めてブラジル人学校を選択するということができる。日本の学校に通わせたくないがための緊急避難的な対応としての選択ではない。そして、子どもは、日本の学校での生活にそれほど否定的ではないけれども、親の教育熱心さに導かれてブラジルでの大学進学という将来像を共にもつようになり、そのための学校選びを納得して受け入れるということであろう。

第3節 ブラジル人学校についての現状認識

このように、ブラジル人学校を選択するにあたっては、将来ブラジルで進学するためのメリットが重視されているが、学校の現実は期待通りなのだろうか。親は学校の何に満足し何に不満をもっているのか、そして、子ども自身はブラジル人学校での生活をどのように捉え、親の期待にどのように応えているのだろうか。親の強い主導権のもとでブラジル人学校が選択されたことから、以下においては、教育面、交流面各々に関する親の現状認識を中心にみてみよう。

第1項 教育面についての現状認識

はじめに、ブラジル人学校の教育面に関する親子の満足度・現状認識を検討する。

まず親についてみる。子どもをブラジル人学校に通わせて良かった点を問うたところ、「ポルトガル語を身につけられる」「ブラジルで進学するのに有利」の2点については8割以上が満足している。その他「ポルトガル語で学ぶので授業が理解しやすい」「ブラジルの文化を身につけられる」「ブラジルで就職するのに有利」各項についても6～7割が肯定的評価を与えている。日本の学校と比べての学力低下への懸念をもつ親は1割強しかおらず、学校への信頼は篤いように見受けられる。

しかし、ブラジル人学校が開設されてまだそれほどの年月が経過しているわけではなく、学校としての実績が積み上げられてきたわけではない状況を見ると、親の満足度とは、即ち、現在行われている教育の「実態に対する満足度」というよりは、むしろ、学校に対する「今後の期待の大きさ」と解釈すべきだろう。具体的に訊ねれば、学校に対する要望や不満・不安は数多くある（表1-6）。例えば、授業編成や学級編成のあり方については、勉強が遅れている、体育や音楽の授業を充分に行ってほしい、学級数が少なすぎる、複数学年が同一クラスなので効率が悪い、1クラス30人くらいにしてほしい等の意見がある。また、学校設備については、スペースが狭いこと、図書館・食堂が未整備であること、スポーツ施設がないことに対する不満が述べられている。教師に対しては、資質に疑問がある、熱心さに欠けるといったマイナス評価もみられ、もっと相談にのってもらいたい、親への連絡を密にしてほしい（いじめがあっても親が知らないままなのは困る）、宿題のチェックをしてほしい、学校への持ち物チ

表1-6 ブラジル人学校への要望

(単位：%)

	父	母
子どもの教育に関して教師と話をしたい機会がほしい	83.2	80.6
子どもの友人の親と接する機会をつくってほしい	64.1	64.5
先生にはもっと熱心に教えてほしい	66.7	64.2
もっと行事等で学校に関わる機会がほしい	68.7	71.8
放課後、学校にいられる時間を長くしてほしい	22.6	22.8
子どもが日本社会に触れあえる機会がもっとほしい	88.9	88.3
日本語ももっときちんと話せるように教えてほしい	95.2	96.3
N	261	264

各項目について「とてもそう思う」「そう思う」「あまりそう思わない」「全くそう思わない」という4回答選択肢を提示し、「とてもそう思う」「そう思う」と回答した者の合計比率。無回答除く。

エックをしてほしい、励ましてほしい、行儀を注意してほしい、といった要望があげられている。この場合、授業参観やPTAへの参加頻度を訊ねる質問に対して、そもそもそういった機会が「存在しない」と回答する親が4割にのぼるということは、教師と親たちの連絡・連携体制が確立され周知されていないことを意味するといえる。子どもの成績については個別的に教師に相談するよりない状況であろうと思われ、そのことは子どもの教育にはプラスとはいえないだろう。さらには、健康管理が充分ではないこと（ワクチンをしてくれない、学校で食べる弁当の栄養バランスがよくない）、学費が高いこと（日系ブラジル人の親の年収は200～400万円未満が最多層であるのに対して、学費は、最も高い学校では諸経費込で月額7,6万円である）への不満も存在する。

こうした要望や不満をみて気づくのは、これらの多くは日本の学校との比較のなかから出てきたものであろうということである。というのも、日本の学校（公立学校）は、学費もかからず、カリキュラムも多彩で、学校設備も整っており、ともかく非常に面倒見のよいのが特徴だからである。予防接種や健診など健康管理、栄養価を考えた給食制度もある。さらには、生活習慣などのしつけもしてくれ、放課後の非行の心配もしてくれる。教師は熱心で、授業参観、懇談、PTA活動もさかに行われ、学校行事（運動会、発表会等）もいろいろある。ブラジル人の親は進学のためのより有利な環境を求めてブラジル人学校を選んだのであり、もともと日本の学校に対して悪印象をもっているわけではないとすれば、ブラジル人学校に移ってあらためて日本の学校の優れた点に気づいたところもあるのではないだろうか。ブラジル人学校には大いに期待を寄せ、満足すべき点も多々あるにもかかわらず、日本人との別学を望む親は2割程度でその他は共学を望んでいるとの結果が出たのは、日本人との交流の必要性を認識しているからであると同時に、生活全般への目配りのきいた日本の学校環境を再評価しているからではないだろうか。教育熱心といわれる日系ブラジル人の親からすれば、教育機関としての面倒見の良さという点においては、日本の学校の方が高い評価を得ているということも充分あり得るだろう。

このように考えると、子どもの成績について不安や悩みを抱える親が多いのは、進学を見据えた手厚いフォローが充分になされていないゆえであろうと推測される。現実には、ポルトガル語授業を受けてさえいればブラジルの大学に進学できるわけではないだろう。親が積極的に子どもの勉学をサポートしても（8～9割の母親が家庭で勉強をみてやり、テストの結果をチェックし、進路について話し合っている）、学校での指導が効果的になされていなければ期待される成果は得られない。そうすれば親の不満が今後益々強まることも考えられる。

これに対して、子どもの側はブラジル人学校での勉学生活をどのように認識しているのだろうか。親の主導のもとに転入学してきたとはいえ、6割強の子どもが「このままこの学校に通い続けたい」と述べている。9割以上の子どもが勉強の出来に自信をもっており、学校の楽しみを問うと、「好きな授業を受けること」という回答が「友達づきあい」を抑えて最多である。ポルトガル語で授業を受けることができるようになったことで、授業内容がよく理解できるようになり、子どもたちの勉学に対する態度も積極的なものになっていると思われる。しかし、勉強は楽しみであると同時に悩みの種ともなってお

り、学校の悩みの半分は「成績」と「進路」に関するものである。3番目に多い悩みは「授業のこと」であり、こうしてみると、子どもの多くが勉強のことで悩みを抱えているといえる。「先生が足りない。スペースがない。理科の実験するところとかない。」（6年女子）という学校の教師や設備に対する不満を述べる者もあるが、それはごく少数である。

上で述べたように、親はブラジルの大学に進学することを期待していることから、子どもに対して、ひたすら成績アップを求める傾向も見受けられる。歯医者志望の7年女子は、「親は勉強しなさいとよく言う。英語を一生懸命勉強するのは将来アメリカの大学に行くため。」と述べる。彼女の両親はともに工員である。「いい成績をとらなければならない」という親からのプレッシャーを受け続けるのは、子どもにとっては辛い状況だろう。「進級できるか不安」「試験の成績が心配」といった悩みが多くあげられている。こうした親子関係からは摩擦が生ずる可能性も高く、子どもにとっては新たなストレスとなっているものと思われる。

第2項 日本社会との関わりについての認識

次に、ブラジル人学校に在籍する子どもと日本社会との関わりについて親子がどのように認識しているのかを検討する。

まず、親の認識をみる。ブラジル人学校に通うことによって、日本の子どもとの交流減（親のみとすると、現在、日本人の友人がいる子どもは約4割しかいない）、日本の習慣や文化と触れる機会減、日本語忘失など、日本との関わりが全般的に希薄になっていることについては、8割超の親が、日本社会と触れあえるような機会をもっとつくってほしいとの要望を述べている。親自身は交流の必要性を認識しつつも、実際は、あまり日本人と交流する機会をもたないと述べるが、子どもにとって日本人との交流が必要かという問いに対しては6割以上が必要と答えている。具体的には「日本の学校と交流してほしい」「日本の神社やお寺や歴史的建造物を見学してほしい。もっと日本の文化を学んでほしい」といった意見が出されている。従って、国際交流の重要性を親は十分に承知していると思われる。勉学に励み進学することが最重要課題であるとはいえ、日系ブラジル人だけの閉鎖的な環境、閉鎖的な人間関係のなかで暮らすことは、日本社会で日本人と共に生きるトレーニングの経験をもたないということであり、このことに違和感をもつ親も少なくない。

日本語教育については、授業数を増やすなどしてきちんと話せるように教育してほしいとの要望が強い。それを望む親は9割に達する。では、ほとんどの親が、子どもには日本語とポルトガル語の両方を話せるようになってほしいと考えるのはなぜか。それは、親が、高学歴とならんで言語能力を子どもの将来に役立つものとして重視しているからと思われる。つまり、グローバル化の時代を迎え、就職地として日本やブラジル以外の国を選ぶ（選ばざるをえない）ときも、複数の言語を操る能力があれば、いずれの地でも、有利な条件で就職することが期待できるのである。その意味で、ブラジル人学校であれば、ポルトガル語を保持しつつ日本語を勉強することができ、さらに、英語やスペイン語を学べば3カ国語以上をマスターすることも可能であるとの期待があると思われる。なかには、学校での日本語教育の補いとして、通塾や通信教育で漢字や日本語を勉強させる親もいる。「塾（公文）では漢字と数学をやっている。日本語検定まであと2ヶ月しかないから一生懸命やらないと。70点以上じゃないと受からない。」（6年女子）「1日に1時間くらい日本語の勉強する」（9年男子）。ところが、子どもたちの言語能力をみると、「ポルトガル語の方が得意」と「ポルトガル語しか話せない」の両方を合わせて約8割にのぼり、日本語とポルトガル語両方が話せるのは2割に満たない。実際には、日本語教育の効果が上がっているとはいえない状況であり、その点に親の不満が集まるのである。

では、子どもの側の認識はどうだろうか。日本の学校からの転校組の4割近くがかつての友人とのつながりをほとんど失ってしまったと述べている。遠距離通学者が多いこともあり、3割ほどの子どもが地元のスポーツクラブで日本人と共に活動している他は、放課後の校外活動はほとんどなされていない。家と学校をスクールバスあるいは自家用車で往復するという毎日であり、日本人との接点は乏しい。従

って、放課後一緒に遊ぶ友人のなかに日本人がいる（「親しかった日本人とは今も学校終わってから遊ぶ。家が近いので。（日本人の友人は）10人くらいいる。」（7年女子））との回答は2割もなく、日本の学校に通っていたときのクラスメートとの交流も家の近所の日本人との交流も維持されることは難しいようである。多くは、「まだ友達だけとあまり会えないんだ。俺が学校から帰るとき、まだ日本の学校にいるとかいうことある。」（4年男子）、「時間帯のずれで疎遠。あまり遊ばない。」（6年男子）、「日本の友達とは時間が合わない。土日、特に日、夏休み冬休みとか（は遊ぶけど）。」（6年女子）というように、時間的条件に阻まれてなかなか会えない状況にある。

このように、日本人と付き合う機会が少なければ差別を受けることも少ないと思われ、辛い経験をせずにすむという点においては日本の学校に通う子どもよりも恵まれているといえるだろう。しかし、子どもの多くがこのままこのブラジル人学校にとどまることを望んでいるとはいえ、必ずしも彼らが日本人との交流を否定しているわけではない。6割以上は、友人が日本人かブラジル人かにこだわらないと回答しており（「言葉や生まれた所以外は違うとは感じない。」（6年男子））、機会があれば、日本人と、日本語を教えてもらいポルトガル語を教える、日本文化を教えてもらいブラジル文化を教えるといったやり取りをしたいと考える者も少なからず存在する。

日本語については、将来の仕事に役立つ能力であるとの認識が子どもにもある。日本語上達を望む理由としては「将来日本人と話すため。日本に住むからではなく職業上の必要から」（7年男子）、「この学校なら両方覚えられるから（いい）。将来は通訳になりたい。ブラジル人に日本語教えたり、日本人にポルトガル語教えたりしたい。日本語分らない子は（日本の学校とブラジル人学校の）両方行けばいい。どっちの言葉も必要だから。」（6年女子）、「日本語とポルトガル語両方覚えるべき。日本語を忘れたくない。2つ知っていると日本・ブラジル関係無く友人ができ、よい仕事にも就ける。」（3年女子）といったことが挙げられている。日本語忘失を防ぐために日本語の本を親から与えられるというケースもある。こうした日本語への取り組みのなかで、日本人との共学に意味があると考える者の比率はそう考えない者の3倍以上にのぼる。にもかかわらず、日本人との接触の機会が乏しいままの状態が続き、日本語がきちんと身に付くだけの十分な授業が行われることがなければ、狭いブラジル人社会に暮らすストレスは次第に耐え難いものになることが予想される³⁾。

以上みてきたように、日系ブラジル人親子のブラジル人学校に関する現状認識をみると、ポルトガル語での教育という大きなメリットがあることは否定できないものの、教育の質や程度については期待だけが先行している感があり、実態をみると、親も子どもも安心して勉学に励むことのできる環境が整っているとはいえない状況である。また、日本人や日本社会との交流が減るままの状態におかれ、セグリゲート化が加速度的に進行していることは、親子にある種の閉塞感や孤立感をもたらしている面もあるように思われる。しかし、前述のように、それにもかかわらず、子どもをブラジル人学校に通わせることについては、親の多くが満足を表明している。高い学費負担にたえて子どもを通わせるほどにブラジル人学校を必要とする理由が他にあるのだろうか。

第4節 ブラジル人学校と定住化

ここでは、日系ブラジル人の親が考えるところの将来設計を考慮しながら、親がブラジル人学校に何を求めているのかをあらためて考えてみたい。

親がブラジル人学校を選択するのはブラジルでの進学におけるメリットを期待しているためであることは既に指摘した。彼らは、高学歴取得と現在の言語能力とを勘案して、ポルトガル語での教育およびブラジルでの大学進学を決断するに至っている。しかし、現実に日本の学校と比較した場合にブラジル人学校における教育や指導が特に優れているともいえない面もあり、その点において必ずしも子どもにとって満足すべき選択とはいえない部分もある。にもかかわらず、親がブラジル人学校をよしとするのは、彼らが意図するせざるに関わりなく日本に定住化しつつある現実要因に因るところが大きい。

表1-7 両親の帰国希望あるいは残留希望（複数回答）（単位：人、％）

帰国あるいは残留の条件	父	母	備考
何があってもとにかく帰国する	60(23.0)	65(24.6)	
母国の経済状態が改善されたら帰国する	76(29.1)	71(26.9)	条件付帰国希望
母国の治安が安定したら帰国する	48(18.4)	50(18.9)	
お金が貯まったら帰国する	138(52.9)	136(51.5)	
高齢になったら帰国する	10(3.8)	7(2.7)	
とにかく日本に残りたい	4(1.5)	7(2.7)	
よい仕事があれば残りたい	35(13.4)	43(16.3)	条件付残留希望
家族を連れてこられたら残りたい	11(4.2)	16(6.1)	
日本の習慣に慣れたら残りたい	12(4.6)	9(3.4)	
その他	8(3.1)	6(2.3)	
N.A	43(16.5)	37(14.0)	
データ数	261(100.0)	264(100.0)	
回答数	445(170.5)	447(169.3)	

表1-8 親子が望む最終学歴取得地・就職地・居住地（単位：人、％）

	父		母		子ども	
	教育地	就職地	教育地	就職地	教育地	居住地
日本	20(7.7)	11(4.3)	21(8.0)	5(1.9)	11(6.3)	26(14.8)
ブラジル	157(60.4)	100(38.8)	158(60.1)	104(39.7)	105(59.7)	125(71.0)
子どもの希望次第	68(26.2)	130(50.4)	74(28.1)	133(50.8)	41(23.3)	---
その他	5(1.9)	3(1.2)	9(3.4)	4(1.5)	8(4.5)	18(10.2)
N.A	22(8.5)	16(6.2)	18(6.8)	19(7.3)	13(7.4)	15(8.5)
データ数	260(100.0)	258(100.0)	263(100.0)	262(100.0)	176(100.0)	176(100.0)
M.T計	272(104.6)	260(100.8)	280(106.5)	265(101.1)	178(101.1)	184(104.5)

まず1点目に指摘すべきは、この選択が結果として「親の里心・望郷心・愛郷心を満たす」ことにつながっているということである。というのも、子どもがブラジル進学を目指すことは、親にとっても、具体的な帰国目標となるからである。滞日が長期化するなかで、日系ブラジル人の親の多くはお金が貯まったら、あるいは、母国の経済状況や治安が改善されたら帰国したいとの希望を抱いている（表1-7）。しかし、予定はたたず、時として帰国断念をも意識せざるをえない。そうした不安定な経済的・心理的状況において、子どものブラジル進学という目標は、親自身を故国につなぎとめる「碇」のような意味合いをもつと考えられる。言い換えるならば、定住化が進むなかで帰国を諦めそうになる自分にとっての日々の励みであり、あるいは夢といってもいいかもしれない。6割の親は「ブラジルで」最終学歴（できれば大学以上の学歴を）を取得させることを望んでいる。この場合、進学地（進学国）としてはブラジルに大いにこだわりをみせるものの、就職地については、ブラジルを望む比率は約4割に低下し、進学地に比べて子どもの希望を優先させようとする親が増える（表1-8）。それはなぜか。ひとつには、就職地までは親がコントロールできないと考えるからであろう。しかし、もうひとつ考えられるのは、子どもが大学進学する時期が、親にとっては、まさに帰国時期の目安（デッドライン）としての象徴的な意味をもっているからとはいえないだろうか。

進学地として日本を希望する者や日本とブラジルいずれの学校でもよいとする者が少なからず存在する（3割強）ことも、ブラジル人学校の選択が象徴的な行為であることと矛盾しない。即ち、ブラジル人学校がブラジルの教育機関への進学しか可能にしないことを正しく認識せぬままに学校選択が行われていることは、子どもの学校選択が、的確な情報収集をもとに子どもの将来を現実的に考えたうえでの決断とは必ずしもいえないことを示唆するからである。

2点目は、ブラジル人学校選択は「家族としての絆を保持する」作用をもつということである。家庭

では親子の会話の8割以上がポルトガル語でなされている。子どもがポルトガル語で教育を受けることは、ポルトガル語忘失を防ぐことであり、親子の会話を保証し、日系ブラジル人としてのアイデンティティが失われないという点においても意義がある。子どもが日本の学校に通っている場合、日本語習得とポルトガル語忘失の間で、日本人としてのアイデンティティが確立されず、ブラジル人としてのアイデンティティは揺らぐという中途半端な状態に陥る危険が指摘されている。アイデンティティの揺らぎが親子間に深刻な葛藤をもたらすであろうことを考えると、子どもにポルトガル語・ポルトガル文化の環境を与えることは、日系ブラジル人家族の心理的離散の予防措置としての働きがあるといえる。日本に定住化しつつあるからこそ、そして、同時に、共に帰国するという夢を持ち続けるためにこそ、家族としての絆を意識的に守っていくことが重視されるのである。

以上のことからわかるように、日系ブラジル人の親は、ブラジルに帰国したいが帰国できないかもしれないという不確定な状況において多様な将来設計を描かざるをえず、その際に、心理的な拠りどころとしてブラジル人学校を必要とし、期待を寄せる。つまり、親にとっては、「ブラジル人学校へ子どもを通わせること」は、「ブラジル進学（大学進学）をめざすこと」であると同時に、「ブラジルに帰国するという夢を家族で共有すること」「ブラジルの大学進学という目標を家族で共有すること」「ポルトガル語を磨き家族内のコミュニケーションを豊かにし、その結びつきを確認すること」「ブラジル人としてのアイデンティティを保持・強化すること」といった極めて抽象的・象徴的な意味をもっていると思われる。その意味において、ブラジル人学校は、親が子どもに故国への夢を託して送り出す場所といえるだろう。

第5節 誰のためのブラジル人学校か

これまでみてきたように、ブラジル人学校選択に際して、日系ブラジル人の親は、一見するところ、子どもの高等教育進学のためのステップとしての学校教育に主体的に関わろうとしている。子どもの教育に対する前向きな姿勢は日本の学校に子どもを通わせる日系ブラジル人の親とも共通するように思われる。つまり、学校は、日本社会への適応を準備する場としてではなく、グローバルな視点に立って学習機会を選び取る場として理解されているといえる。しかし、日本の学校を選んだ親とブラジル人学校を選んだ親が決定的に異なるのは、滞日長期化、即ち定住化についての自己認識と将来設計、それに関わる自らのアイデンティティとの付き合い方である。ブラジル人学校を選択した親にとっては、その選択は、事実上、子どものためというより、むしろ、親自身の心理的拠りどころを得るためになされているようにも思われるのである。故国の学校への進学、それも高等教育への進学をめざすという夢や理想を抱くこと、こうした夢や理想について共に語ることこそが、外国で暮らす親子の絆を強固なものにし（少なくとも親はそのように認識し）、外国人として働く親の苦労やストレスを和らげる作用をもつのではないだろうか。

この場合、ブラジル人学校選択を勧めるのが両親のうち母親である場合が多いことに注目したい。母親は、仕事に就いていない場合もあり、そのために父親に比較して日本語能力が低い傾向にある。従って、日本語環境で生活するストレスをより強く感じているものと思われる。とすれば、「お金が貯まったら帰国する」という大前提は父親と共有されているとしても、それとは別に、「できれば今すぐにも帰国したい」との切羽詰まった願いをもっているとしても不思議ではない。子どもは、母親から、将来のための高学歴取得の必要性を説かれると同時に、こうした切実な感情を情緒的にうたえられることで、ブラジル人学校選択を受け入れざるをえない心境になるのではないだろうか⁴⁾。

ブラジル人学校は、確かに、短期的にみるならば、日本語習得や日本人との交流等をめぐる諸々のストレスから子どもたちを解放するというプラス効果をもつ。しかし、長期的にみた場合、果たして子どもの将来を見通したうえでの賢い選択といえることができるのだろうか。ブラジル人学校の歴史が短い現時点において、ここに通うことが子どもの将来にどのようなメリット、デメリットを与えるのかという

問いに対する答えはまだ出ていないのである。例えば、現在の日系ブラジル人の親の働き方をみればわかるように、ブラジルにおいて高学歴を有し社会的威信の高い職業に就いていた場合であっても、日本で働くとなるとブルーカラー職に就かざるを得ない。また、職に就く前の段階においても、日本の高校進学・日本の大学進学を希望しても受験資格がない、大学に行かず日本の高卒資格で就職したくとも資格がない、等の事態が起こりうる。子どもの希望進学先（進学国）をみると、親と同様、ブラジルの学校にしか進学できないという基本的なことを承知していない者が3割ほどいるのであり、そうした者にとっては、ブラジル人学校で学んだことが結果として自分の将来の可能性を狭めてしまうことも予想されるのである。

それを裏付けるように、子どもの将来設計をみると、彼らは親のように帰国を当然視しているわけではない。日本の学校にも行きたいがブラジルの学校にも行きたい、日本にも住みたいがブラジルにも住みたい、というように、日本とブラジルの間で迷っている場合も多いのである。「日本もブラジルも好き。ブラジルの大学に行きたいと思っているけど、大きくなったら日本に戻るのもいいと思う。」（4年男子）、「親は5年後に帰国する際に一緒に帰ってほしいと言うが、自分は日本の大学に進みたい。」（8年男子）、「ブラジルより日本に住みたい。10年くらいいるから日本に慣れてる。母は帰るけど自分は日本に住みたい。大人になったら日本に（住みたい）。」（5年男子）、「親はお金を貯めて帰国したい（と言う）が、親がいいと言ったら日本に居続けたい。」（6年男子）、「ちょっとあぶないから（治安がよくないから）日本にも住みたいけど、ブラジルにも住みたい。」（3年女子）といった言葉がきかれる。このように、親が抱くような望郷の念は、必ずしも子どもに共有されているわけではない。日本で暮らした年月の方が長くなれば、ブラジルの記憶は薄れ、現在の生活への愛着が増すことも大いにあり得る。例えば、既に滞日期間が10年を超える7年女子は、「ブラジルには2才までで憶えてない。ブラジルより日本が好き。」と述べている。従って、親が帰国を熱く説こうとも、子どもには子どもの将来イメージがあり、その結果、親の希望と自分の希望との板挟み状態にある子どももかなりの数存在するのではないだろうか⁹⁾。

子どもは親の思惑を敏感に感じ取り、理解しようとし、そして、それを受け入れざるを得ない存在である。ブラジルで進学することが、親にとってひとつの目標になれば、子どもにとってもそれが目標となるだろう。しかし、低学年のうちには親の期待をそのまま自分の希望とすることができるとしても、学年があがるとともに子ども自身の将来像が明確化してくれば、親子間のギャップが生まれる可能性は大きいといえる。なぜなら、上で述べたように、親にとってブラジル人学校が自らをブラジルにつなぎとめる「礎」としての象徴的・観念的な意味をももつものに対して、子どもにとってのブラジル人学校は、あくまでも、社会を生きていく術を身につけるための現実的なトレーニングの場でなければならないからである。

現在、学費の安いブラジル人学校を求める声に応えて新しい学校を設立しようとする動きもあるときくが、日系ブラジル人の定住化傾向を踏まえて子どもの将来のことを考えるならば、日本の教育資格が取得できないこと、日本の高等教育への接続が不可能であること、加えて、日本語能力が低いままであること、日本人との交流網が狭いことが、彼らの将来にどのような影響を与えるのかを慎重に議論する必要があるだろう。日本とブラジルの子どもにとって日本の学校が共生のための契機を提供することは確かである。日本の学校において多民族化・多文化化した環境にふさわしい学校文化と教育プログラムを構築する可能性を引き続き探っていくことも重要であろう⁹⁾。教育は先ず何よりも子どものためのものでなければならない。

注

1) 太田・大泉地区における日系ブラジル人労働者の「定住化」の全体像については、小内透・酒井恵真編著『日系ブラジル人の定住化と地域社会 群馬県太田・大泉地区を事例として』（2001年 お茶の水書房）を

参照のこと。義務教育段階の公立学校に在学する日系ブラジル人児童・生徒をめぐる問題は同書の第6章、および本報告書第1部で詳細に論ぜられている。

- 2) ブラジル人学校間での転校もごく少数ではあるが見受けられる。理由は様々である。例えば、1年前に来日したある2年男子は最初入学したブラジル人学校から数ヶ月で別のブラジル人学校に転校している。転校理由は「転校先の学校の方が教え方が上手だから」である。前の学校での友人も一緒に転校したということである。また、ポルトガル語習得のために転校を望むケースもある。「人(生徒数)が少ない別の学校で1対1でポルトガル語ができるようになってから、また、ここに戻ってきたい」(3年女子)。その他、「授業料が高いので安い方の学校に移った。」(6年男子)というケースもある。ブラジル人学校間の児童・生徒の移動状況、移動理由については今後注目していく必要があるだろう。
- 3) もとよりブラジル人学校に学ぶ児童・生徒がすべて日本語よりポルトガル語に堪能であるわけではない。滞日期間が長期にわたり、日本語の方が得意である場合は、ブラジル人学校において、さらに大きなストレスに悩まされることになる。例えば、2才で来日し13才になって初めてブラジル人学校で学ぶことになった女子(在学1年未満)は、日本語での生活に慣れており、ポルトガル語環境で暮らす毎日について、「他の教科もポルトガル語で授業されるので、友達に教えてもらってわかるけど、友達がいないとだめ。ポルトガル語ができない。」「日本の学校は今の学校が大変なときに行きたいと思うこともある。日本語で勉強したらもっと楽。」と述べる。
- 4) 現実の日系ブラジル人の定住化傾向を考えるならば、帰国を可能にする条件が満たされるのは容易なことではないと思われるが、それにもかかわらず、母親は子どもに対して、非常に近い将来帰国するかのような表現をしているようである。というのも、子どもの側は「もうすぐ帰国するから、帰国したときに困らないように今からポルトガル語を身につけておかなければならない」というニュアンスで母親の言葉を理解しているからである。例えば、ブラジル人学校を選んだのは「いつか帰ろうと親が思っているからその準備のため。お母さんは2年後に帰国したい(と言っている)。」「(5年女子)、「(日本の中学を)辞めたくなかった。でも、母親が「ブラジル帰るから」と言ったので。すぐ帰ると言った。」「(8年女子)、「今年あたりブラジルへ帰る。いつ仕事がなくなるかわからないからブラジルに行く(と母親が言っている)。」「(6年男子)、「母さんの意向。来年帰国の予定。ポルトガル語覚えてほしい(と言われた)。(でも)日本の学校に通いたい。」「(3年女子)といった発言がある。
- 5) 現実の定住化傾向にかかわらず、子どもたちの思考は軽やかに国境をとびこえている点において親とは大いに異なっている。定住か帰国かという二者択一ではなく、両国間を自由に行き来する将来イメージを語る者もいる。「10才になれば帰国する予定。だが、ブラジルに帰っても日本語を学び続け、また、日本に遊びに行きたいと思っている。」「(2年男子)、「どっちにも住めるからどっちでもいい。国籍がある。今は日本語勉強したいから日本に住んでいたい。ブラジルに住めば1年に1回くらい日本に来たい。日本に住めば1年に1回くらいブラジルに行ったり、行ったり来たり。」「(6年女子)彼らにとって、住む場所とは「自分が快適に住める場所」であり、言語はそのためのコミュニケーションの道具・武器として認識されている。
- 6) ある5年男子は、もし日本の学校に行けるのであれば、中学に行きなおい、日本の高校に進学し、将来は日本に住みたいとの希望をもっている。日本の中卒資格認定のテストが実施されているという情報に対しては「それを受けたい。」との反応であった。また別の5年男子も、「もしまだ帰らないだったら、日本の中学に戻って高校に進む。」と述べる。帰国が延び延びになり滞日が長期化すれば、全体の傾向として、日本での進学への関心が高まってくる可能性はあるだろう。国家の枠を超えて教育資格を連続的に積み上げていけるような仕組みについて議論していくことが必要になってきたのではないだろうか。

(小野寺理佳)